

討論

大東文化大学経済学部教授

永野 慎一郎

黒柳

さて、それでは、お二方からお話を頂戴いたしましたので、本学経済学部の永野慎一郎先生から、ディスカッション、としてのご発言をお願いします。ディスカッションというのは、お二方のお話をお伺いして、ご自分としてはこんなところに注目をしたとか、このお話の中にはこの点がなかったけれども、どういうふうにお考えでしょうかというふうに、その後の自由討論に対する予備水の役割です。永野先生、それではよろしくお願いいたします。二十分弱ということだ。

永野

本学経済学部の永野でございます。本日は、このような機会を与えていただいた黒柳所長を初め国際比較政治研究所の皆様にお礼をまずもって言いたいと思います。

きょう、配布いたしました資料は、先月、本学エクステンションセンターの公開講座で用いられた資料です。朝鮮半島問題を理解するために、一つの流れとして参考になればと思います。

そこで、本論に入りますけれども、六月の南北首脳会談と共同宣言は画期的な出来事であり、南北朝鮮の和解と統一への道が開かれたという意味において大いに評価すべきであると考えます。また、南北の和解は、東アジア地域の平

和と安定に寄与するということから、大いに周辺諸国も歓迎すべきであると考えております。しかし、五十年以上にわたる分断による構造、対立構造が、簡単に解決できるとは思いません。まさに、和解への長い道のりの始まりであると私は認識しております。

それにしても、電撃的な首脳会談を実現させた金大中大統領と金正日国防委員会委員長の決断と実行力は、いくら褒めても余りがあるほどあっぱれな歴史的な大決断であったと思います。私は、二人のプレーヤーが、必要な時代によくめぐり会ったものだと感じております。金大中大統領は、野党時代から積極的に南北問題に発言し、現実的な提案をしてきました。韓国の歴代大統領の中でも、南北問題に最も真剣に取り組み、現実的な対応をしてきた大統領は、やはり金大中大統領であると思います。

他方、パートナーであった金正日国防委員長は、金大中大統領こそが、自分たちのことを一番理解してくれる信頼できる相手であり、この人とならきつと話ができると認識し、首脳会談を受け入れたのではないかと思います。経済問題など、多くの国内問題を抱えていた彼にとって、南北首脳会談を受け入れたことは、改革・開放への道を開くことであり、一種の賭けであっただけに、慎重に判断した結果であったと思います。金大中大統領を相手にしなければ、二度とこのようなチャンスはめぐってはこないだろうと判断したのではないかと私は分析しております。

そこから、二人の出会いが始まったわけであります。二人の指導者は、単独会談だけでも六時間二十分に及ぶ長時間にわたる真剣勝負の末、兄弟関係にまで発展したようです。一説によりますと、金委員長が金大統領に、「兄貴」と呼んだという話もあります。

二人は同じ金さんですので、兄弟関係にあったといっても不自然ではありませんが、それまでに敵対関係にあった両首脳の関係修復の早さに世界は驚いたわけであります。しかも、外部世界にはほとんど現れたことのなかった金正日

委員長が、自ら空港まで金大統領を出迎え、金大統領の乗用車に乗り込んで二人きりの対話を始めるなど、勇敢な行動、多弁でユーモアたっぷりの彼の言動には世界が驚き、恐らく世界じゅうの人々が、彼に対する認識を改め、評価の見直しの契機となつたのではないかと思ひます。

しかし、事はそう簡単でないところに問題があります。共同宣言は、お互いに歩み寄つて、相違点よりも共通点を探し出してまとめ上げた作品であつたと見受けられます。一方的な譲歩がない限り、妥協案でまとめるということは、外交交渉では常識であります。したがつて、共同宣言に盛り込まれている内容を具体的に実現するためには、さまざまな難関を乗り越えなければなりません。むしろこれからがもつと大変だと思ひます。

イギリスの宰相マーガレット・サッチャー女史の言葉に、「氷は溶け始めたときが最も危険である」という言葉があります。両首脳は真剣勝負で共同宣言に合意し、合意された内容を一つずつ、実現に向けて、南北双方が目下努力しているところであり、現在まで、相互非難の中止、赤十字会談の再開、離散家族の再会、閣僚級会談、特に国防相会談、韓国のマスコミ社長視察団の北訪問、シドニー・オリンピックの開会式及び閉会式の南北選手団同時入場、ソウル・新義州間の鉄道の連結工事の開始など、さまざまに分野で交渉が始まり、交流、協力が進行しています。

南北当局は、もう後戻りできないと考えているのではないかと思ひます。もし、ここで失敗してもとに戻るようなことがあれば、南北和解は先送りにさせられるだけでなく、対立はもつと激しくなりかねないと考えます。そうならば、南北関係だけでなく、朝鮮半島の不安定が、東アジアの平和と安定に直結するだけに、日本を初め周辺諸国にとつても不安要素とならざるを得ません。東アジアの平和と安定のためにも、せつかくの朝鮮半島の雪解けが、途中で危険にさらされないように、周辺諸国もできるだけの支援と協力をすべきであるというのが私の考えであります。

そこで、南北和解の前途に横たわっている困難な問題は何であるのか、その障害を取り除くためにはどのようなす

ればいいか、文正仁先生と金己大先生のご報告に焦点を当て、共同宣言の内容も検証しながら、討論を展開していきたくと存じます。まず、二人の先生方に、それぞれの立場から、南北首脳会談実現の決定的な動機は何であったのかについて伺いしたいと思います。文先生には、金大統領に同行してピョンヤンに行かれて、北側の人々と接触して特に感じたことがあれば、また、従来に比べて変化の兆しがあったのかどうか。金委員長をどのように観察なされたのか、金委員長の人物像などについてもご紹介いただければと思います。

金己大先生には、北朝鮮、特に金委員長が、この時期に首脳会談を受け入れるようになった目的は何であり、どういう道順で南北和解へと進めようとしているのか。北朝鮮の経済の停滞の原因は何であり、解決策は何であると先生は分析なされているか。また、金先生は、南北首脳会談の直後、北朝鮮に訪問されて、一般大衆はどのように受け止めていたかについても感想などを述べていただければと思います。

私は、基本的には、まず和解の努力によって相互理解を深めながら、協力し合うことによって、信頼関係の回復に努めることが先決であると考えております。戦争を放棄し、平和を構築することで、お互いに利益を得るのだという確認が必要であると思います。そのためには、難しい問題よりも、やりやすいことから始めることがよりベターであろうと考えます。困難な問題にぶつかって、解決できずに破局になってしまふよりは、確実なことからお互いに納得のいくやり方でやっていけばいいということになります。当然ながら、国民にも知らせ、理解と協力を求めることも大事であります。考えてみれば、分断以来、五十五年もかかってお互いに違う道を歩もうとしてでき上がった対立構造を、一年か二年ですべて解決しようとするのは無理のような気がいたします。

それにしても、究極的な目的は統一でありますから、どういう形態の統一が可能であるのか、どういうプロセスが望ましいのかについても当然研究しなければなりません。それを国民に提示し、コンセンサスを形成する必要があるま

す。六月十五日の共同宣言に盛り込まれている合意事項のうち、第一事項に、「南北の統一問題を民族の力で自主的に解決する」とあります。文先生もご指摘のとおり、七二年の南北共同声明には入っていた「外部勢力の影響と干渉の排除」という語句が抜けていることがいささか気になります。金正日委員長が、従来の主張である在韓米軍の撤退及び韓米軍事同盟の解体を取り下げ、在韓米軍の存在を認めたとということになっていますが、これは本当なんでしょうか。統一の自主的解決ということになると、現行の休戦協定を平和協定に移行しなければなりません。韓国は休戦協定の署名国ではないため、当事者だけでは解決困難な問題があるのではないかと思えます。この問題についての両先生のご意見をお伺いしたいと思います。

また、第二項に、「南側の連合制と、北側のゆるやかな連邦制案に共通性があると認め、この方向で統一を目指す」とあります。南の連合制案に北が歩み寄って、ゆるやかな連邦制案へと変更したものと思われます。しかし、防衛と外交は二つの政府がそれぞれ持つという共通点もありますが、連合制案には、二国家二体制を想定しているのに対し、北側のゆるやかな連邦制案には、一国家二体制を想定しています。

また、統一機構の構成においても、南側は、南北首脳会議、閣僚会議、国会会議などを考えているのに対し、北側は、民族統一機構を考えているようです。そうすると、民族統一機構の中身が問題になるのではないかと思えます。金大中大統領は、北側は高麗連邦制を放棄したとおっしゃっているようですが、本当にそのように考えてよいものでしょうか。北側は、ゆるやかな連邦制を高麗連邦制の前の段階として位置づけているという見方もあります。この点についても、二人の先生方のご意見を承りたいと思えます。

韓国国内では、金大中政府の対北朝鮮政策に対して不満を持ち、非協力的な勢力がいます。特に、野党ハンナラ党を初め、保守層にその傾向が強いように見受けられます。その理由として、共同宣言に、緊張緩和や平和構築について

触れてないこと。統一の主体と形態が、北の視点のみが反映されていること。非転向長期囚の返還は寛大であるけれども、抑留漁民や戦争捕虜も言及すべきであったのではないかということ。首脳会談及び共同宣言はスピードが早過ぎて、イデオロギー的混乱を促進し、安保を危うくしていることなどを挙げています。

たしかに、このような問題がおろそかにされている見方もできますが、従来の南北の合意事項がいまだに誠実に履行されていないことを考えれば、実現可能な合意内容として、現段階ではやむを得なかったのではないかと思います。次の段階で、もつと踏み込んだ議論をすればいいと思います。

保守層の中には、相互主義を唱え、一方的に与えるだけでは失敗する。共産主義者はそんなに甘くはない。いずれ裏切られるという強硬論者さえあります。既得権層は、東西ドイツの例を挙げ、現在の韓国経済も大変なのに北を助ける余裕はない。重い負担はもうごめんだという意見もあります。

しかし、統一に必要な費用は、数量化されていない価値も入れなければならないと思います。例えば、平和共存によつて得られる利益、戦争の脅威の減少から得られる利益、自由往来とか、相互の協力によつて得られる利益など、計り知れない価値があるはずです。冷戦時代の発想はもう捨ててもいいのではないかと思います。もちろん北側もこれに応えて、このような不信を払拭するための努力をすべきだと思います。少なくとも南北の平和構築と統一問題は、与野党とも政争の道具として利用すべきではないと考えます。政府も、誠意をもつて説明し、情報を可能な限り公開し、理解と協力を求めるべきであると思います。あわせて、両先生のご意見を承りたいと思います。

以上をもって私の討論を終わりにします。(清聴ありがとうございました。(拍手)

黒柳

永野先生、どうもありがとうございました。

先生の討論の部分、秒まで合わせて、ぴったり二十分で終えていただきました。非常にわかりやすく、しかも冷静でかつ的確なご意見であったと思いますし、ある意味では健全な猜疑心といえますか、建設的な批判というか、そういう形で、南北首脳会談についてのご意見を頂戴いたしました。